

井ノ口 蘭さん（東大農学部助教）



私の略歴

神奈川県藤沢市出身で、中学校は地元の公立中学校に通っていました。高校は学芸大附属高校に進み、東京大学理科二類農学部水圏生物科学専修で修士・博士まで終えました。博士号取得後はハワイ大学と東京大学大気海洋研究所で研究員をしたのち、東洋大学生命科学部で5年間助教という立場で教員をしていました。この4月から東京大学農学部に戻ってきて助教をしています。私の特徴は、一つは魚の研究者であること、もう一つは今3人の子供を育てていることです。歳は12歳・4歳・0歳で、特に12歳の子は農学部在学中に出産しましたので、その話をのちほどしていきたいと思います。

東大農学部を目指した理由

中学生の時にタイに旅行に行ってダイビングを経験しました。そのとき海で泳ぐたくさんのお魚を見て、魚の研究者になりたいと思うようになりました。高校は学芸大学附属高校という進学校で、周りに東大を目指す同級生がいっぱいたいたので、私も東大生になってみたいと思うようになりました。

そこで、高校生の時に東京大学農学部水圏生物科学専修を目指すことにしました。しかし、東京大学の理科二類を受験したのですが現役では合格できず、合格した他大学に一旦入学しました。その後、その大学で最低限の単位を取りつつ東大を受験するという、いわゆる仮面浪人をすることにしました。このとき気付いたのは、東大に合格しなくてもその先の目標が決まっていれば自分の夢にアプローチする方法はいくらでもあるんだなということでした。

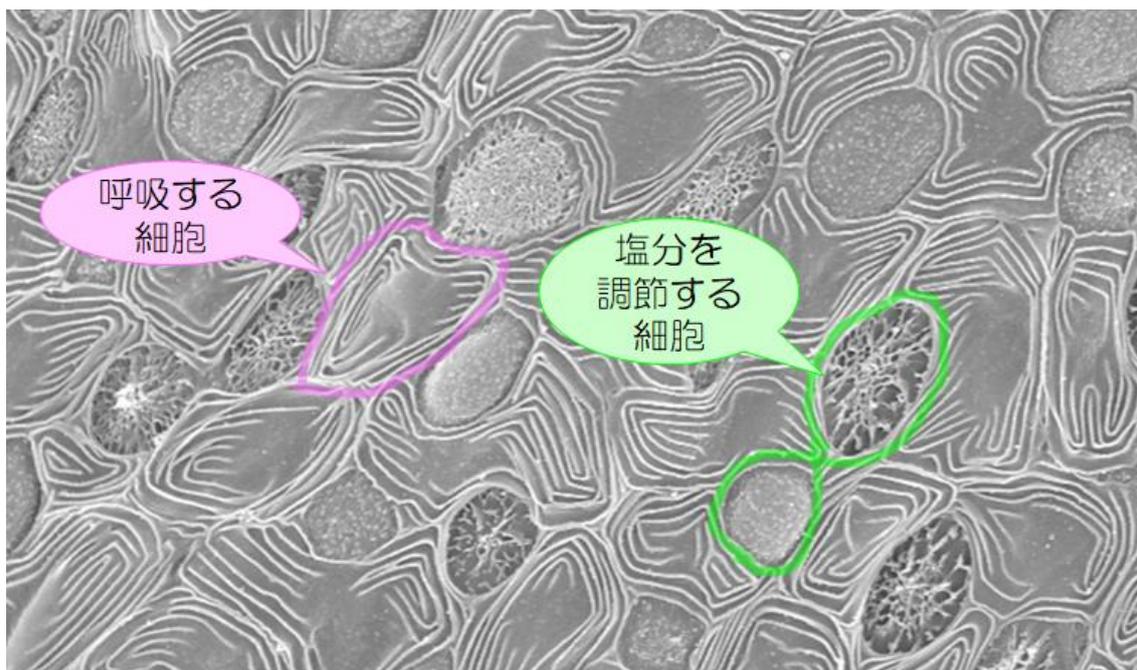
水圏生物科学専修とは

結局東大に受かって理科二類に入り、農学部水圏生物科学専修に進学しました。この水圏生物科学専修がどういうところなのかを簡単に説明します。水圏とは、海、湖、河川、池など水のあるところです。プランクトン、無脊椎動物、魚類、大型哺乳類などの生物が水圏に住んでいます。水圏生物科学専修というのは、多様な水圏環境に生息する多様な生物について学びそして研究できることです。ちなみに、私が入った年の男女比は、男子が20名、女子が2名で、女子が少なく最初はちょっと驚いたのですが、全員で仲良くなる雰囲気だったので途中から男女比は気にならなくなりました。この水圏生物科学専修は実習が多いことが特徴で、三年生の夏休みにはま

ず浜名湖で実験ざんまいの2週間を過ごし、その後油壺でタコを採ったりする漁業学実習が1週間ありました。ほかにも食品科学見学旅行や磯採集、築地市場見学、葛西臨海水族園見学などがありました。

四年生から研究開始

私が水圏生物科学専修で一番魅力的だと思ったのは同級生です。普通に生活していても出会えなかった魚好きの人たちが20人くらい集まっていて、釣りとか料理とか生態に詳しい人たちと楽しく過ごせたことです。あとは研究室が多いところですが、魚の研究はすごく狭い範囲なのかなと思っていたのですが、中に入ってみると広い分野だということに気が付きました。大学四年生で研究室に入って研究を始めました。研究内容について簡単に説明します。これは魚のエラの写真です。



エラを一本取ってきて3000倍ぐらいに拡大するとこのように見えます。エラが呼吸器官であることは知っている人も多いと思うのですが、ピンクで囲まれている細胞が呼吸する細胞で、緑色で囲まれている丸い細胞が塩分を調節する細胞です。

私はこの塩分を調節する細胞に着目していて、魚がどのように環境適応しているか、特に塩分環境適応について調べています。これがわかると、なぜ金魚が海に棲めないのか、なぜサケやウナギは海と川を移動するのか、なぜフグは川に棲めないのか、なぜ海に棲んでいる魚のお刺身は海水みたいに辛くないのかという素朴な疑問にも答えることができます。私たちに身近な水産の分野だと、美味しい魚が食べたい、養殖現場で健康に魚を育てたい、ということにも関わる大事な分野です。ほかにも、地球環境の変動は近年問題になっていますが、地球温暖化の影響や海洋酸性化を調べるときにも大事な分野になってきます。

大学院在学中に結婚・出産

学部を卒業後、私はそのまま大学院に進学することにしました。私は修士課程、博士課程を出たのですが、基本的には修士課程は2年、博士課程は3年で、修士課程に進学したのは同級生

22人のうち16人でした。さらに博士課程修了まで行ったのは3人で、他大学から大学院に来る人も結構多かったです。同級生の多くは修士修了後に就職していきました。個人的には、大学院のときに私生活でも大きな変化がありました。修士課程で結婚して、博士課程で出産したので、学生のうちで母親だった期間が2年間ありました。在学中の出産育児が実際どうなのかということについてお話します。東大の中には各キャンパスに学内保育園があり、子育てサークルもありました。子どもがいる学生から研究者まで集まっていて情報交換をしていました。学生で出産して良かったと思うことは結構あって、一つは私自身授業料を払っている身分だという気持ちが強かったので、出産で休むことに後ろめたさが全然なかったことです。10ヶ月ぐらい休んだあとにそろそろ研究に戻りたいと思って戻ったのですが、子育てと研究の両立が自分のペースでできたなと思っています。良くなかったことは、大学院生の研究に没頭できる時間に、時間を気にせず研究するということができなくなったという点でしょうか。在学中の出産育児についてまとめると、学生で出産する人は意外というなという印象です。あとは大変そうに思われるけど、どうにでもなりました。

大学院修了後は子供とハワイへ

博士取得後は研究者として働き始めます。まずハワイ大と東京大学でポスドクという立場で働きました。ポスドクというのは博士研究員、ポスドクターフェローの略です。研究に専念できる時期であると同時に任期があるので将来が見えず苦しい時期でもあります。私の場合もどちらも3年間の任期があったので、その3年のうちに業績を出しつつ次の仕事を見つけなければいけないというプレッシャーを感じていました。その後、助教という立場で働き始めました。助教というのは大学教員の最初の一步で、今までやっていた研究に加えて教育もするようになります。この時期も任期があって契約期間が限られているので、相変わらず「次、どうしよう?」と不安な気持ちで日々過ごしていました。

それでは、海外で行った研究職がどんな感じだったか簡単にお話します。私の場合はハワイ大学で1年半研究員として働きました。その時に2歳だった息子と2人でアメリカに渡っています。これが、私が実際に行った研究所のHawai'i Institute of Marine Biologyです。



島丸ごと一個が研究所になっていて、毎日ボートで通っていました。研究内容は、哺乳類だと母乳分泌ホルモンとして知られているプロラクチンが魚だと淡水適応ホルモンであることが知られており、プロラクチンがどういうふうに関環境適応を促しているか調べていました。渡米して最初の2ヶ月は、どうやって動いていいかわからず自己嫌悪の日々でしたが、慣れてくれば日本と同じように実験を普通にできるようになったと思います。

日本と違うなと思ったことで一番大きかったのは、みんなが自分のプライベートの時間を大切にしているということです。私の上司は、2週間バケーションをとって夫婦で旅行に行ったり、私に研究所に来る必要がないのなら家で仕事していいよとよく言ってくれていました。その他には、女性の教授が多かったです。

あとはハワイだからだと思うのですが、みんなが肯定的な言葉をかけてくれるので自己肯定感が高まった時期でもありました。子育てに関しては、子どもが騒ぐと日本だと親が白い目で見られることが多いと思うのですが、向こうは子どもが直接注意してもらえるので、たくさんの人に子育てしてもらったなと思いました。海外での研究職の経験は私にとっては自分の価値観を変える経験ができたなと思っています。研究と子育ての両立もやりやすかったです。

助教としての仕事環境

現在は、助教として、研究に加えて講義、学生指導などを担当しています。私は東大に来る前に東洋大で助教をしていたときの5年間で2回産休を取りました。制度は整っているけど前例が少ないという印象です。あとは、助教の場合は任期があり、競争もあるので長い育休を取って研究から離れると競争に負けてしまうのではないかと不安がありました。そのため、私の場合は二人目も三人目も産んで8週間で仕事に復帰しました。ですので、育休が取りやすいかということでもないのですが、女性が働きやすい環境を作るという方向にすごく進んでいると思いますので、これからどんどん良くなっていくだろうなということは確信しています。仕事に復帰してからは、自分のペースで実験を組めるので子育ての両立はしやすいのではないかと思います。

中学生、高校生の皆さんへのメッセージ

人生において新しいことを始めようとするとき、自分の選択が正しいか不安になることも多いと思います。特に、「向いていないのではないかと」「大変だと思うけどな」とか「前例ないことしちゃうよね」とか言われたり、自分で常識的に考えたらこっちにした方がいいんじゃないかなと思ったりすると、さらに不安になっていくと思います。なので、まわりの人の意見や自分の中に刷り込まれた常識からちょっと目をそらして、本当は何がしたいのかなという自分の本当の気持ちに耳を傾ける時間を作ることが大事なのではないかなと思っています。どんどん生き方が多様になっている時代だと思うので、皆さんは自分にフィットする生き方を見つけてください。応援しています。

落香織(日本銀行)



私の略歴

私は生まれも育ちも鹿児島県で、高校は鹿児島県立鶴丸高等学校というところを卒業しました。ちなみに理系で、物理・化学を選択していました。その後東京大学の理科二類に入学し、進学振り分け制度で農学部を選び、二年時の後半からは農学部環境資源科学課程の農業・資源経済学専修というところに進みました。理系としては珍しく大学院には行かず学部で卒業しまして、その後日本銀行に入行しました。現在は日本銀行に籍をおきつつ、ハーバード大学ケネディスクールという公共政策大学院で国際開発行政について勉強しています。

東京大学を選んだ理由

受験先を選ぶにあたって、地域と学部という二つの選択ポイントがありました。一つ目の地域については、地元の鹿児島に残るかそれとも東京など他の都市に引っ越すか、二つ目の学部については医学部かそれ以外かという点がそれぞれ選択肢にありました。私は高校生頃は漠然と将来は社会の役に立ちたい、社会の役に立てる職業につきたいと考えていました。具体的に何になりたいかという明確な夢は持っていなかったもので、それならば東京大学という日本でも有数の、将来社会的な影響力を持つ学生が集まる環境に一度身をおいてみようと思いついて受験を決めました。また東京大学には進学振り分け制度というのがあり、一通り教養科目について勉強し幅広い学問について知った上で学部選択ができるので、具体的にやりたいことを大学に入ってから見つけられるかもしれないということも後押しになりました。就活まで終えて振り返ってみると、やはり地方から東京に上京することは就職先の選択肢が広がるという点についても大きなメリットがあったと感じています。

農業・資源経済学専修を選択した理由

この進学振り分け制度で私は農学部の農業・資源経済学専修を選びました。なぜここを選んだのかという話の前に、まず農業・資源経済学についてご紹介します。私なりの経験と解釈ですが、農業・資源経済学とは農業や資源に関する課題について理系と文系の両方の知識を駆使して解決策を考える学問であると考えています。文系と理系が融合しているのは、農学部の他の専修と

比べても珍しい特徴だと思います。当時同級生が30名ほどいましたが、そのうち10名弱つまり3割程度は文科二類や文科三類などの文系学科から進学してきた人たちであったことにもそれがよく現れていると思います。学生時代には、経済学の理論や応用、農業政策の歴史や経営学に至るまで、様々な角度で理解を深めることができました。また、そうした知識を地域経済学フィールドワーク実習や農場実習、ゼミなどで応用する機会も多くありました。いずれも先ほどご紹介した理念の達成に向けて不可欠なことを勉強することができたと思います。

卒業論文は「なぜ離島で仔牛が飼育されているのか」

このように多岐にわたる経験を積める農業・資源経済学専修でしたが、私は特に人々の生活に関して社会の仕組みという大きな目線で分析し解決策を提示できる点に非常に魅力を感じて、進学を決めました。そうした考えの下で執筆した、集大成ともいえる卒業論文について紹介したいと思います。私はロケット発射場などでも有名な種子島に実際に行きまして、農村調査を行いました。畜産、特に仔牛を育てる繁殖経営に関する研究をしていたのですが、この研究の出発点は、種子島のような日本の南の方の離島では多くの農家さんが仔牛を育てているのはなぜなのだろうということでした。離島はそもそも物を運ぶのに費用がかかりますし、東京や大阪などの大都市からも遠いので、基本的に他の地域に比べて産業面では不利な場所です。しかしそうした場所で仔牛を育てる畜産業について深く知れば、離島に住んでいる人々の生活をよりよくするヒントが得られるのではないかと考え、卒業論文のテーマとして取り組むことにしました。分析の過程では、文系や理系の知識をフル動員して検討しました。結果として分かったことは、まず一つは離島で育てられているサトウキビの搾りかすを仔牛の餌として使えるため他の地域で仔牛を育てるよりも費用を抑えられること、もう一つは質の良い仔牛を育てるための知識や経験が農家さんの間で蓄積しており高値で売れる仔牛を育てることができることが理由でした。このように現代の農業や広く社会で起きている現象には何事にも理由があって、そしてその理由や構造がわかれば将来をよりよくできる解決策のヒントが得られるという事実を体感できました。

卒業後は日本銀行に

このように学部生時代には農業・資源経済学の魅力に惹かれて自分なりに納得できる卒業論文を書くこともでき、進学してよかったなと一息ついていたのですが、そうしているうちに次の岐路、就職もしくは大学院の進学を考える時期を迎えることになりました。結局、日本銀行に縁があって就職することになりました。なぜ日本銀行を選んだのかといいますと、まず大学での経験をきっかけに農業を超えて広く社会の仕組みに興味を持つようになったということが一つ、また幅広い就職先で活躍する専修の先輩方から色々な経験について聞いたりアドバイスをもらったりする機会が多かったことも理由です。具体的に日本銀行ってどのような仕事をしているのだろうと、おそらく疑問に思われていると思います。中学校や高校の授業でもお馴染みの日本銀行の役割といえば、「銀行の銀行」、「政府の銀行」、「発券銀行」の3つだと思います。もちろんこの3つも日本銀行の大事な面、大事な役割を捉えているのですが、実際の仕事はこれだけではありません。日本銀行は、日本の中央銀行として、物価の安定と金融システムの安定を、金融政策を通じて実現する責任を持っている組織です。この物価の安定というのは、つまり物の値段の急激な変動を防ぐという

ことですね。例えばリンゴの値段が昨日は 50 円だったのに今日は 300 円になっていたなんて社会になってしまうとどうでしょう。もしかしたら明日は 10 円に下がるかもしれないから今日は買わないようにしておこうなどと、あれこれ考えて、欲しい時にものを買うことが難しくなってしまいます。このように、物の価格を安定させることは安定した生活を支えることにつながります。また金融システムの安定というはお金が世の中に円滑に行き渡るようにするということです。これも、例えば家を買いたいという人が住宅ローンを組んで銀行からお金を借りたいときに借りられるような環境を整備することで、人々の生活をよりよくする手助けをするということになります。こうした政策を実施するにあたって大切なことは、経済をよく知ることです。そうでないと日本銀行が政策を変更したときに実際に社会にどのような影響が出るかわからず、誤った判断を下してしまう可能性があります。日本銀行は日本で最大級のシンクタンクつまり研究機関であり、日本全体に関するいろいろな問題について経済学の知識を駆使して解決策を考え、政策を実施している機関であるともいえます。

農学部で学んだことが仕事に直結

日本銀行には農学部の出身者というのはいくつかありますが、実際に働いてみて農学部での経験が役に立っているなということがたくさんあります。一つは農学部で行ってきたフィールドワークの経験ですね。日本銀行で働いている人で学生時代に人々の生活一つ一つまでに着目して研究してきた人はさほど多くはない中で、実際の仕事ではそうした視点が求められることもあり、私の経験が組織に役立っているなと思うことがあります。また理系、農学に限らず理系全般の知識が役に立つことも多いです。経済学は、理系の学問のように一つの事象に対して数式を使って簡略化してその仕組みを捉えようとする学問でもあります。実際に、高校で皆さんがひょっとしたら将来これは何のために使うのだろうと思っているかもしれない微分積分などの数学の知識が、今仕事で大いに役立っています。また文系出身の同僚とは違った視点でものを見ることもできますし、さらに、仕事ではたくさんのデータを統計ソフトで処理することもあり、いずれも大学の授業で実際に習得した知識が役に立っていると思います。

ハーバード大学ケネディスクールに留学



そしていちばん最近の進路選択は大学院への留学でした。日本銀行にはアメリカやイギリスの大学院で主に経済学などを学ぶ機会を得る留学制度があるのですが、現在私はその制度を利用

して公共政策大学院で勉強させていただいています。私がこの制度を利用して留学しようと思った目的は3つありまして、一つ目は国際的な視点を身につけたいということです。大学で卒業論文を書いていたときには日本の離島の経済という範囲、日本銀行に就職してからはそれが日本全体へと広がってきて、その中で日本経済をよりよくするには、もっと広い世界の経済について知らない日本経済独自の特徴や位置付けがわからないなと思うことが増えてきたというのがあります。二つ目に、これまでの私の歩みの中で英語をしっかりと勉強したのは大学の受験勉強だけという中で、将来的には他の国の中央銀行との国際会議などにも参加する必要があるとわかり、留学というチャンスを活かして英語で話すことへの苦手意識を払拭したいなという思いもありました。さらに農学部では知識を利用して解決策を考えるとところまで経験を積んできたのですけれども、日本銀行はそこからさらに政策を実施するということまで持っていく必要がある機関です。この最後のステップである政策実施については経済学だけではなくさらなる専門知識や経験が必要だなと感じることも多かったので、そうした面に特化した大学院への留学を決めました。私の参加している学科は国際開発行政修士課程というところなのですが、例えばインドの農村の女の子の就学率を上げるにはどのような政策をどのように、そしてどのような時期に実施すべきか、またメキシコの貧困層に効率的に補助金を届けるにはまずどのように貧困層を定義・特定しそしてどのようにお金を運ぶか、など分析・政策の立案からそして実行という全ての過程・幅広い過程について勉強しています。

中学生・高校生の皆さんへのメッセージ

このように人生の様々な岐路で自分なりに進路選択をしてきました。最後に、こうした私の個人的な経験から皆さんへメッセージを送らせていただきます。まず高校生の時にやりたいことが漠然としていても、その後やりたいことを見つけるチャンスはまだたくさんあるということです。私の場合むしろ大学生になってから以降の方がそのチャンスが多かったと思います。その時自分の中に何か軸を持っているとチャンスを活かしやすいとも思います。私の場合、中高生の頃からせっかく今頑張っているのだから、将来働く時にはこの知識を社会に役立てたいという強い軸がありました。それが東京大学の進学振り分け制度による農業・資源経済学専修への進学や日本銀行への就職、そしてアメリカ大学院への留学という選択につながっていきました。ですから、皆さんも漠然としていても良いので自分が将来何を成し遂げたいかをじっくり考える機会を作ってみてください。今後の進路選択に大いに役立つと思います。

城宝由紀子さん(日本工営株式会社)



私の略歴

私は生物・環境工学専攻で博士号を取得し、現在は日本工営株式会社という民間企業で開発コンサルタントとして働いています。富山県の中でも小さな町の出身で、町立の小中学校を卒業したあと県立の高岡高校に入学、そこから東京大学理科二類、生物・環境工学専攻に進学、博士号まで取得しました。私の経歴のちょっと変わったところといえば、博士課程の間に3年間、西アフリカのギニア共和国という国で稲の研究を行っていたことです。このときの経験がその後、在ギニア日本大使館での仕事につながり、さらに現在の開発コンサルタントという仕事につながっています。

開発コンサルタントという仕事の内容については後ほどご説明しますが、この仕事を通じてアフリカを中心にこれまで約10カ国で仕事をしてきました。

皆さんは東大生や東大卒業生と聞くと厳しい受験戦争に勝ち残り順風満帆な人生を送っている人というイメージがあるかもしれませんが、でも私自身は決して模範的な生徒ではなかったですし、希望通りの進路に進めないというようなことも何度もありました。でも紆余曲折ありながら今はやりたかった仕事ができるようになっています。そんな私の経験をこれから皆さんにお伝えできればと思います。

東大農学部に入學するまでの経緯

突然ですが、皆さんはエボラ出血熱というものを耳にしたことはありますか？5、6年前に世界的に注目を浴びたのですが、エボラはアフリカで定期的に流行しており、私が中学生だったときにもエボラが話題になっていました。そこでエボラにすごく興味を持って、私は中学二年生にして将来はエボラの研究者になるという夢を持ちました。当時は今のようにインターネットが発達しておらず、図書館や本屋さんで情報を集め、日本でエボラの研究ができるのは京都大学らしいということを知り、京都大学進学、いずれはアフリカへと考えていました。夢を叶える最初のステップとして、当時県内一の進学校だった高岡高校に無事合格しました。高校では、部活動への参加が義務だったので陸上部に入りました。部活動を頑張りすぎた結果、高校二年生の途中には成績が学年の半分以下まで落ちたこともありましたが、部活で培われた気合と体力で引退後に猛勉強しまし

た。残念ながら第一希望だった京都大学には合格できず1度目の挫折を味わうのですが、当時は国公立大学の受験は前期後期で2回あり、後期入試で東京大学理科二類に合格することができました。

入学後の紆余曲折

さて心機一転、東京大学理科二類での大学生活が始まりました。エボラの研究者になると夢はいったん断たれ、最初は目標が見つけれないままでしたが、2年間の教養学部での学びを通じ、遺伝子工学など農学部でバイオ系の研究がしたいと思うようになりました。このように教養学部の間に自分のやりたいことを探することができるというのは東大の特徴ですし、東大に進学してとても良かったと思っています。また大学でも部活動に打ち込みたいと思っており、せっかく大学に入ったのだから新しいことを始めようとアーチェリー部に入りました。部活動に真剣だったことと東京での学生生活が楽しすぎたこともあり学業がおろそかになってしまい、第一希望の生命化学科には進学できず、第二希望の生物・環境工学に進学しました。ここで2度目の挫折を味わったわけですが、悪いことばかりではありませんでした。生物・環境工学専攻は部活動に理解のある学科だったので、授業を休まないし出場できない国体への参加を教授たちが認めてくださったので、希望通り国体に出場することができました。

第一志望の学科には行けなかったものの、生物・環境工学専攻でも稲の遺伝子発現の解析を行うという希望に比較的近いような研究ができていたので、もともと研究職に就くことが希望だった私は、民間企業への就職は当時まったく考えずそのまま大学院に進学しました。しかしながら、修士課程で実験室内でイネを育てて解析するという日々を繰り返すうちに、中学生のときに夢だったアフリカに行きたいという思いが強くなりよみがえってきました。アフリカに行ける手段として唯一思いついたのは青年海外協力隊としてアフリカに派遣されることだったので、協力隊を受験したのですがここでも不合格、ここで3度目の挫折を味わいました。

人生の転機

その後もアフリカに行きたいということを常に口に出していた結果、熱意を汲み取ってくれた所属研究室の教授が知り合いのつてをたどってアフリカで稲の研究をしている研究者を紹介してくれました。東大の先生方には顔が広い方が多くて、人脈を活かせば専門分野外の方ともつながることができる点も東大に進学してよかったなと思うポイントです。

この研究者の方が研究対象に選んだ国がギニアでした。私は同じ研究室に所属したまま博士課程に進学して、修士までとは研究テーマを大きく変えて、ギニアにおける稲の水ストレス耐性に関する研究を現地で3年間実施することになりました。ギニアには在留邦人は外務省・JICA 関係者を含めて30名ほどしかいませんでしたが、その分日本人同士の交流が盛んで、大使館関係者やJICA関係者の方々に非常によくしてもらいました。ギニア滞在中にJICAの仕事で来ていた開発コンサルタントの方々と知り合う機会があり、そこで初めて開発コンサルタントという業界を知り、卒業後は研究ではなく開発援助の分野に行こうと思うようになりました。帰国後博士論文を書きながら卒業後の進路を模索する中で、第一希望の開発コンサルタント会社には、新卒採用ではすぐ海外業務につける保証はなく数年間は国内で業務してもらうこともあると言われました。私はす

ぐにでも海外で仕事をしたかったので悩みました。

卒業後も念願のアフリカで活躍

そうこうしているうちにギニア滞在中にお世話になった在ギニア日本大使館の関係者の方から、ギニアの大使館で働いてみないかというお話がありました。ギニアは環境が厳しいためあまり進んで行きたいという人がいないようなのですが、私はギニア滞在を楽しんでいたのも、当時を知る方から誘っていただいたという形になります。私は喜んでそのお話を受けることにしました。思いがけないところで進路が拓けてきました。大使館で働くというと外務省の職員、公務員として仕事をするイメージが強いかと思いますが、私が従事したのは専門調査員という非公務員ポストで期限付きの職員という扱いでした。調査員はその名の通り、与えられたテーマについての調査研究を行うことが仕事で、私に与えられたテーマは政治経済動向の調査でした。専門調査員の任期が終わり改めて開発コンサルタント業界を就職先に選んだところ、これまでのギニアでの研究や専門調査員としての経験が評価され、即戦力として中途採用してもらうことができました。コンサルタント業界は出張も多く体力もいる仕事だと言われましたが、体育会系出身であることも評価につながり無事採用してもらうことができました。入社後は自分の希望通りアフリカを中心に仕事をしつつ、今日に至ります。

開発コンサルタントという仕事

コンサル、コンサルタントという言葉は、普段から何となく耳にすることもありません。具体的に言うと、コンサルタントとは、お客さんの目標を実現するために支援する者という意味になります。さらに、開発コンサルタントとは、援助実施機関が発注するプロジェクトを受注・契約し、実際に途上国で計画立案・設計・技術移転を行う仕事をする人たちとすることができます。

具体的な例として、私も携わった仕事について紹介します。ケニアの北部のとても乾燥している地域では干ばつが頻発し、人々が生活苦に陥っていました。



元々は牛やラクダ・ヤギなどを遊牧することで生計を立てているのですが、干ばつによって家畜が被害に遭ってしまったため、牧畜以外の生計手段を教えることで生活が安定するよう支援することがこの仕事の目的でした。その仕事の中で、私は遊牧民の少数民族の人たちの女性達を中心に野菜栽培を教えるという仕事をしていました。このように、自分の持っている知識・経験を活かし現地の人たちに技術を移転するのが、開発コンサルタントとしての仕事の一例です。

コンサルタントの仕事の仕方としては、複数の国、複数の案件を同時に受け持って1ヵ月程度の出張を繰り返すというような仕事もあれば、駐在という形で同じ国に年単位で滞在するような仕事もあります。私の場合、例えば、2015年にはセネガルとナミビアの2つの案件に従事しており、2ヶ月程度の出張を繰り返しました。年間約7ヶ月は出張に出ている、残り5ヶ月は日本にという生活リズムでした。一方で、2016年から2018年にはマダガスカルに長期で滞在し、稲の技術指導をするという業務に携わっており、2度の休暇帰国を除いてずっと現地に滞在していました。どのような仕事の仕方をするかは本人の希望でもありますし、家庭の事情に合わせて国内での業務を中心にするなどの配慮をしてもらうこともできます。

中学生・高校生の皆さんへのアドバイス

一つ目。人生必ずしも第一希望通りにいかないこともあると思います。でもその時々でできることを精いっぱいやって後悔しないことが重要だと思います。後悔しなければ新たな環境で前向きになり、また新たにやりたいことを見て目標を見つけることができます。二つ目。やりたいと思うことは口に出して周囲に伝えるべきだと思います。熱意が通じ支援をしてくれる人が出てくることもあります。三つ目。人と人の縁はとても大切です。思いがけない出会いから人生が拓けることもあります。

最後に、他人と違うこと、あえてマイナーなことをやることでオンリーワンの人材になれるという可能性もあります。自分がやりたいと思ったことに臆せず進んでいってください。